

資料紹介

アジア太平洋戦争中の日本の子どもの替え唄（前編）

— 笠木透の替え唄研究 その1 —

鵜野 祐介

＜緒言＞

2014年8月、子どもの文化研究所発行の月刊誌『子どもの文化』2014年7+8月号の特集「うたと語りと声」に、「『戦時下の子どもがうたった歌』—『海にカバ 山にカバ』」と題する論考が掲載された。執筆者笠木透氏は、1969年に開催された「中津川フォークジャンボリー」の企画者であり、「フィールドフォーク」を提唱し40年以上にわたって活躍してきたフォークシンガーであるが、同年12月、直腸がんのため77歳で亡くなられた。

筆者（鵜野）は、1995年に刊行されたCDボックス『昨日生れたブタの子が 戦争中の子どものうた』（音楽センター）によって笠木氏のことを存じ上げており、2014年の同誌特集企画に関わった際、「子どもの替え唄¹⁾」について書いていただこうと発案した。この年の4月、出版社を通して執筆依頼をしたところ、笠木氏はがんの手術直後にもかかわらずご快諾くださった。1937年生まれのご自身の体験を交えながら綴られた論考は、ユーモアあふれる軽やかさの一方、当時の子どもの立場から大人社会を告発し平和を希求する、ずっしりとした重さを持つものでもあった。刊行後、御礼の電話を入れたところ、十分な時間が取れず書き散らしたような文章になったとお詫びされると同時に、替え唄に関して集めた資料を未整理のままお持ちである旨話された。そこで、お宅にお邪魔して資料を拝見したいとお願いし、訪問日を約束していただいた。ところがその10日ほど前、体調不良を理由にキャンセルのお申し出があり、心配していたさなか逝去された。今年（2015）3月、ご自宅を訪ね、由紀子夫人と、また笠木氏の長年の音楽仲間である増田康記氏にお会いし、氏の替え唄研究の資料とようやく対面した。そしてお二人から膨大な資料のコピーをお預かりした。

本誌において4回にわたって、笠木氏が遺した替え唄に関する資料を紹介し、替え唄研究を通して氏が明らかにしたかったことについて考究していく。今回と次回は「アジア太平洋戦争中の日本の子どもの替え唄」と題し、旧満州や朝鮮半島・台湾などの占領地を含む当時の日本において、日本人の子どもたちが口ずさんでいた替え唄を紹介する。また次回の後半には、敗戦から1950年代頃までの、「戦後の」子どもの替え唄を紹介する。第3回は、戦時中から戦後にかけて日本の若者や大人たちが歌った、政治的なメッセージを持つ替え唄や「春歌」と呼ばれるエロチックな内容の替え唄を扱う。そして最終第4回では、同時代の朝鮮半島や中国において韓国・朝鮮人や中国人が歌っていた、反日・抗日のメッセージを持つ替え唄を扱う。以上のジャンルを通覧し総合的に考察することによってはじめて、笠木氏が問いつづけた「人間にとって替え唄を歌うことの意味は何か」、ひいては「人はなぜうたを歌うのか」という主題に迫ることが可能となるものと思われる。

資料紹介に先立って、替え唄に関する先行研究を概観しておこう。まず有馬敲による三著、『替歌

研究』（2000）、『替歌・戯歌研究』（2003a）、『時代を生きる替歌・考』（2003b）が特筆される。前二書は明治期から現代に至る子どもおよび大人が創作・伝承してきた替え唄を通時的かつ網羅的に紹介した資料集成であり、3番目の著書はこれらの資料に基づいて「明治から現代にいたる替歌の流れと諸相を考現学的に解明」（有馬 2003b：254）したものである。日本の替え唄を研究する上で、これら3冊は必読の書と思われる。

歴史的にみると、1960年代から替え唄の収集に着手した有馬とほぼ同時期に、替え唄の持つサブカルチャー、カウンターカルチャーとしての意義に注目したのが評論家の鶴見俊輔と紙芝居作家・評論家の加太こうじで、両者他編『日本の大衆芸術 民衆の涙と笑い』（1962）はこの主題に取り組んだ最も早い時期の論考と言えよう。加太はまた『軍歌と日本人』（1965）において、軍歌によるイデオロギー統制を図った為政者の意に抗ずるように厭戦・反戦の替え唄が歌われていたことに注目している。さらに、加太が柳田邦夫・吉田智恵男とともに編集した『おとなの替歌百年』（1971）は、「替歌の歴史をつづり、替歌にともなった民衆の歴史を回顧する」（同3）もので、替え唄の風刺性が強調されている。一方、稲垣真美は、『もうひとつの反戦譜』（1976/1994）において「反戦替え歌と反戦の声などを一冊にまとめ」（同11）、落書や替え唄の中にこそ「自然な、素朴な、止むにやまれぬ人間性にも裏づけられていたつよみがあった」（同148）と結んでいる。

子どもの替え唄に特化したものでは、鳥越信『子どもの替え歌傑作集』（1998）がある。全編子どもの替え唄が鳥越自身の回想や大学生へのアンケート結果なども交えた解説と共に通時的かつジャンル別に紹介されている。その他、阪田寛夫『童謡でてこい』（1986）、川崎洋『日本の遊び歌』（1994）等の中にも、子どものうたの一ジャンルとして替え唄が取り上げられている。なお、笠木『昨日生れたブタの子が』に紹介された替え唄もこの鳥越（1998）に収載されている。

さらに笠木が注目していたのが、自身と同世代の「少国民」体験を持つ作家たち、山中恒、奥田継夫、中沢啓治等の作品および評論である。特に山中『子どもが〈少国民〉といわれたころ』（1982）、同『ボクラ少国民と戦争応援歌』（1985/1989）、奥田『ボクちゃんの戦場』（1969）、中沢『はだしのゲン』（1973-1985）は、笠木（2014）の論考末尾に参考文献として明記され、その中に登場する軍歌やその替え唄のいくつかは笠木（1995）の構想ノートにもメモ書きされている。

ところで、笠木が子どもの替え唄に注目したのは何故だろうか。『昨日生れたブタの子が』には次のように記されている。

まだまだたくさんの、戦争中の^(ママ)替え歌があります。このCDボックスに収録出来たのは、氷山の一角、ほんの一部なのです。また、地域によって、一行だけ、とか、一字だけ違っているということも多いので、それも一曲とすれば、全国各地に膨大な数の替え歌が陽の目も見ずに、うずもれていることでしょう。出来ることなら、それを、全部掘り出して、記録しておきたい、そう思っているのです。

ところが、この国では、それがそう簡単ではない。替え歌が、うたとして、市民権を得ていないのです。替え歌もうたのうち、いや、うたのうちどころか、庶民のうたの中で、重要な一部分を占めているにもかかわらず、です。その元歌が、どんなジャンルの音楽や歌であれ、庶民が替え歌に作りかえることによって、庶民が自ら表現する、「民衆のうた」という、素朴ではあっても、かけがえのない、ジャンルを形づくっているのに、町史や村史などに記録されることもな

く、その価値は、ほとんど認められていません。誰が作ったのか分らない、誰かが作った替歌が、口伝で、人から人に伝っていき、そんな、「手渡しされていく」ものこそ、ホンモノの文化ではないのか、ぼくはそう思っているのです。

大江健三郎さんが、人間の心をいやす、という芸術の、本来持っている働きのことを、話しておられる。ぼくらは、あの暗黒の時代に、これらの替歌をうたうことで、自分をはげまし、心をいやしていたのです。戦争中の替歌など、低俗で下品で、単純で軟弱で、こんなものは芸術ではない、とおっしゃる人もいることでしょう。でも、あの時代、ぼくらにとって、これがうたであり、これが芸術だったのです。ほかに何があったのだろうか（笠木 1995：22）。

敗戦から 16 年後の 1961 年に生まれた筆者には、今回のテーマに戦争体験者として取り組むことは無論できないが、遺された資料の整理と紹介の作業を通して、笠木氏が伝えたかった想いに少しでも迫ってみたい。（紙幅の都合で楽譜が掲載できなかった。できれば長田暁二（1970）などを参考にして是非歌っていただきたい。）

<凡 例>

- ・今回紹介する資料は 3 つに大別される。

第 1 に、笠木（1995）『昨日生れたブタの子が 戦争中の子どものうた』に掲載された替え唄テキストである。今回入手した同書の草稿には、これらの多くについて出典がメモ書きされていたため、可能な限り原典に当たって用字も原典に揃えた。

第 2 に、笠木（1995）ならびに笠木（2014）「戦時下の子どもがうたった歌—『海にカバ 山にカバ』」（『子どもの文化』2014 年 7 + 8 月号所収）の文末に参考文献として紹介されていた書籍に収載された替え唄のうち、本稿の対象となる「アジア太平洋戦争中の日本の子どもの替え唄」に該当すると思われるテキストである。アジア太平洋戦争（1931～1945）の 15 年間よりも前もしくは後に歌われたと思われる替え唄や大人の歌った替え唄については、笠木（1995）草稿メモや笠木（2014）に記されているものであっても除外した（例えば、中沢啓治『はだしのゲン』第 4 巻以降の替え唄）。

第 3 は、前掲『昨日生れたブタの子が』出版後、「この CD ブックスを聞いて、思い出した替歌があったら、ぜひとも、ぼくに教えてください」（笠木 1995：23）という笠木の呼びかけに応じて読者が手紙や葉書で寄せた、また笠木のコンサートの来場者が寄せた替え唄テキストである。これらの手稿はコピーして保存されており、今回筆者がお借りした資料の中にあつたものである。ここでは「笠木 1995 への投稿」と記載する。

- ・掲載順は、まず元歌をジャンル別に、「A. 軍歌、B. 唱歌・童謡、C. 流行歌、D. その他」に分け、ジャンル毎に題名の 50 音順で掲載した。今回は「A. 軍歌」の替え唄のみ紹介し、次回は B 以下のものを紹介する。題名の前に、全てのジャンルにまたがる通し番号を（1）、（2）、……のように振った。題名の後にその歌の発表年と作詞者を挙げ、原則として 1 番の歌詞のみを太字で挙げた。歌詞の表記は、長田暁二編『日本軍歌大全集』（1970）に準拠した。

- ・替え唄は、出典の出版年の古い順に、バージョン（異型）ごとに小文字アルファベットを a. b. ……のように振った。歌詞の後に出典を記載し、複数の文献に同一のバージョンが掲載されている場合には古い順に列挙した。漢字の用法や仮名遣い、空白や改行などは原則として出典に準拠し、複数ある場合には古い方に準拠した。
- ・その替え唄の成立・普及の状況や背景を理解する上で参考となる解説を適宜付した。

＜テキスト紹介＞

A. 軍歌

- (1) 「愛国行進曲」(1937年、詞：森川幸雄)

見よ東海の 空明けて／旭日高く 輝けば／天地の正気 澆刺と／希望は躍る 大八洲／おゝ清
 朗の 朝雲に／そびゆる富士の 姿こそ／金甌無欠 揺ぎなき／わが日本の 誇りなれ／／(中略)
 ／臣民われら 皆共に／御稜威に副わん 大使命

- 見よとうちゃんの 禿頭／旭日高く輝けば（以下不明）（加太 1965：85）
- 貧民われら みな共に／水を飲んで大悲鳴（以下不明）（加太 1965：85）
- 見よ東条²⁾のはげ頭／旭日高く輝けば／天地にぴかりと反射する／蠅がとまればつるとすべる／
 おお清潔にあきらかに／そびゆる禿の光こそ／戦争進めゆるぎなき／わが日本のご同慶（加太
 1971：51、鳥越 1998：185、有馬 2000：327）
- 見よ東条の禿げ頭／蠅がすべって止まれない／天地が滑って止まれない／とまらにゃ成らない大
 使命／行け白髪にしがみつき／輝く髭の白米は／百姓たちよりむしりとる／我が日本の誇りな
 り（笠木 1995 への読者投稿）
- 見よ 東条のはげ頭／ハエがとまれば ツルッと滑る／滑って止って また滑る／止って 滑っ
 てまたとまる／おお テカテカの禿頭／そびゆる富士も 眩しがり／あの禿どけろと 口惜し
 泣き／雲に隠れて 大むくれ（有馬 2000：327）
- 見よ ぶっ欠けの皿あけて／まだ食い足りぬ 芋の粥／哀れな児らに ハラハラと／涙は落ちぬ
 親同士／おお 欠乏の朝ご飯／そびゆる富士の 姿ほど／米・味噌積んで ゆるぎなき／わが
 日本に早くなれ（同上）
- 見よ東条の禿げ頭／物価は高く金はなく／亭主のベント（弁当）空っぽで／女房嘆くやかましや
 （同上）
- 見よ 父さんのはげあたま／ハエがとまれば つるりつとすべる／（よくよく見たら毛が三本）（同
 上）
- ああ父さんのはげ頭／旭日たかく輝けば／頭の上で運動会／滑ってころんで一等賞（同上）
- 見よトウキョウのポテト焼き／油であげてゴマふって／一銭二銭と買いにくる／小父さん小母さ
 んに忙しい／早く買いたいポテト焼き（同上）

(2) 「愛馬進軍歌」(1939年、詞：久保井信夫)

くにを出てから 幾月ぞ／ともに死ぬ気で この馬と／攻めて進んだ 山や河／とった手綱に
血が通う

- a. 昨日落とした一銭金を／今日はやっとかつと見つけ出した／パン^{ばん}買^こけ走ればたった一つ／おじさんまひとつどま／まけっくいやんせ (笠木 1995 への投稿)

(3) 「海行かば」(1943年、詞：大伴家持)

海行^ゆかば／水漬^{みづ}くかばね／山行かば／草むすかばね／大君の／辺にこそ死なめ／かえりみはせじ

- a. 海にカバ／ミミズク馬鹿ね／山行かば／草むすかばね／お、君の／へにこそ死なめ／かえり見はせじ (笠木 1995 : 12-13、有馬 2003a : 287)
- b. 海ゆカンパー／みづくカンパネー／山ゆカンパー／草むすカンパネー／大君のへにこそカンパー／かえりみはカンパー (有馬 2000 : 356)
- c. 海にカバ 水ずくカバね／山にカバ 草むすカバね／おお君の へにこそ死なめ／かえり見はせじ (笠木 2014 : 72)

——「これは当時、第二国歌と言われた『海行かば』の替え歌。元歌は元旦の式などでよくうたわされた。玉砕した兵隊さんを鎮魂する歌だから、笑ってはいけなと言われたが、とても無理だった。カバは四頭も出てくるし、君のオナラでオレが死ぬのかよ、と聞こえた」(笠木 2014 : 72)。

(4) 「加藤隼戦闘隊」

(1 番) エンジンの音轟々と／隼^{はやぶさ}は征く雲の果て／翼^{よく}に輝く日の丸と／胸に描きし赤鷺^{しるし}の／印は我らが戦闘機

(4 番) 干戈^{かんかまじ}交うる幾星霜／七度^{ななたび}重なる感状の／いさをの蔭に涙あり／あゝ今は亡き武士^{ものふ}の／笑って散ったその心

- a. チンタワー (かぼちゃ) 交える雑炊米／七度、タジラス、アンランスー／シブイ (冬瓜) のかげに豆腐あり (沖縄 - 船越 1981 : 228)
- b. エンジンの音消えちゃって／隼飛ばず草の陰／翼の日の丸剥げちゃって／胸に描いた若鷺は／継ぎはぎだらけの飛行服 (笠木 1995 への投稿)

——「『陸軍第 54 飛行戦隊隊歌』が正式名であるが、「加藤隼戦闘隊」(藤田進・黒川弥太郎主演、東宝砦作品映画)に挿入した為に、映画と同名の「加藤隼戦闘隊」として馴染むようになった」(長田 1970 : 119)。

(5) 「紀元二千六百年」(1940年、詞：増田好生)

金^{きんし}鵝輝く 日本^はの^{はえ}栄ある^{ひかり}光 身にうけて／いまこそ祝え この朝^{あした}／紀元は 二千六百年／あゝ
一億の胸はなる

- a. 金鵝上った七十銭／栄^はえある光六十銭／翼ひろげた鵬翼が／上った上った九十銭／あゝ、一億がおどろいた（高橋 1969：128、笠木 1995：5、鳥越 1998：190）
- b. 金鵝あがって十五銭／栄えある光三十銭／いよいよあがるこのタバコ／紀元は二千六百年／あゝ、一億の民が泣く（加太 1971：44、笠木 1995：5、鳥越 1998：189）
- c. 金鵝あがって十五銭／栄えある光三十銭／遥かに仰ぐ鵬翼は／二十五銭になりました／噫一億は皆困る（埼玉県北葛飾郡幸手町の国民学校 6 年男子－稲垣 1976/1994：125）
- d. 金鵝輝く十五銭／栄えある光三十銭／それより高い鵬翼は／苦くて辛くて四十銭／あゝ、一億の金はない（川崎 1994：295）
- e. 金鵝あがって 十五銭／栄えある光 三十銭／朝日は昇って 四十五銭／鵬^{ほうよく}翼つらねて 五十銭／あゝ一億の 金は減る（橋本 1994：39、笠木 1995：5、鳥越 1998：190）
- f. 金鵝輝く日本の／あいこでアメリカヨーロッパ／パッパッパリーの見学に／にんにん肉屋の大ドロボウ／あゝ、教会の鐘は鳴る（東京－笠木 1995：5）
- g. 金鵝輝く十五銭／晴ある光三十銭／今こそホウヨク四十銭／ホマレは据え置き七銭だ／あゝ、タバコの値は上がる（笠木 1995 への投稿）
- h. 金鵝あがって十二銭／はえある光二十銭／翼ひろげた鵬翼は／あがりあがって三十銭／あゝ、一億は火の車（岐阜県各務原市－笠木 1995 への投稿）
- i. 金鵝輝く 十五銭／栄えある光 三十銭／今こそ上がるタバコの値／頃は昭和十八年／あゝ、鵬翼は二十五銭（鹿児島県－笠木 1995 への投稿）
- j. 金鵝たばこは 十五銭／栄えある光は 二十銭／つばさひろげた鵬翼は／上がった上がった三十銭／あゝ、一億は魂^{たまが}上った（熊本県－笠木 1995 への投稿）
- k. 「金鵝」輝く十五銭／栄えある「光」三十銭／それよりからい「鵬翼」は／あがったあがった二十五銭／あゝ一億は金がない（鳥越 1998：188）

——「金鵝」「光」「朝日」「鵬翼」はいずれも煙草の銘柄。替え唄が作られ、歌われた時期や地方によって値段が違っている。「金鵝の値段は、昭和 16 年 10 銭、昭和 18 年 15 銭、昭和 19 年 45 銭、昭和 20 年にはなんと 70 銭」（笠木 1995：5）。「昭和 18 年頃よく歌われた。物資不足と値上げが続く中、子どもたちは場所を選ばず合唱していたが警官も憲兵も見て見ぬふりをしていた」（熊本県－笠木 1995 への投稿）。

(6) 「月月火水木金金」(1940年、詞：高橋俊策)

朝だ夜明^{うしお}けた潮の息吹き／ぐんと吸い込むあかがね色の／胸に若さ^{みなぎ}の漲る誇り／海の男の艦隊勤務／月月火水木金金

- a. 夜ノ夜中ノマツクラ闇デ／ウントフンバルアカガネ色ノ／クソノ太サトミナギルニホヒ／裏ノ畠ノ肥溜メ便所／ケツケツカイカイ蚤クツタ（山中 1982：251-252、笠木 1995：2、鳥越 1998：181、有馬 2003a：285）
- b. 朝だ五時半（四時半）だ 弁当箱下げて／家を出ていく おやじの姿／昼めしは ミミズのうどん／ルンペン生活 なかなかつらい／月月火火ノミがいる（中沢 I：2、笠木 1995：3、鳥越 1998：182、有馬 2003a：285）
- c. 朝だ五時半だ ごはんのしたく／今朝のごはんは団子と大根／昼のおかずは大根と団子／集団生活なかなかつらい／ケツケツカイカイノミシラミ（奥田 1969/2001：243、鳥越 1998：181-182）。
- d. 朝だ四時半だ 弁当下げて／家を出て行く トンコロ（父さん）の姿／服は引っちゃぶれズボンのはっちゃぶれ／家のトンコロの出る行く処は／一ヶ月三円の 月給かなあ（鹿児島県 - 笠木 1995 への投稿）
- e. 朝だ四時半だ 弁当箱下げて／うちを出て行く 親父の姿／下はボロボボン 上はボロシャツ／うちの親父は 土方の大将／一日五銭の 安日給（長野県伊那 - 笠木 1995 への投稿）
- f. 朝の四時半に 紙屑拾い／家へ帰って ご飯の仕度／其のおかずは ミミズのうどん／（不明）／月月火水木金金（岐阜県土岐郡笠原町 - 笠木 1995 への投稿）

——「下品な言葉が出てくるのは、大人がいやがるからです。子どもたちは、わざと大人たちに、下品な言葉をぶつけ、大人たちの既成概念や、社会の表面的なマナー、大人の権威に、闘いをいどむのです。子どもたちは、叱られることは百も承知です。大人たちが怒れば怒るほど、下品な言葉のもつパワーと、その言葉を発することのできるものたちだけが持てる連帯感と、苦しいときに自らをはげましてくれる歌のもつ原点を感じる事が出来るのです」（笠木 1995:3）。「(c)について『ボクちゃんの戦場』の中で歌われているもので、この作品が疎開児童の集団生活を描いたものだけに、そのきびしい環境から生まれるべくして生まれた歌詞」（鳥越 1998：183）。

(7) 「元寇」(詞：永井建子)

四百余州を挙る／十万余騎の敵／国難こゝに見る／弘安四年夏の頃（以下省略）

- a. 四百余州の乞食／ザル持って門に立ち／奥さん飯進ぜよ／くれんとわしゃ泣くよ（大連市 - 笠木 1995 への投稿）
- b. 四百余人の乞食／ザル持って門に立つ／オッサン銭をくれ／穴のあいた銭をくれ（八千代市 - 笠木 1995 への投稿）

——「(a)について」この歌は中国人を嘲った歌かなという気もして気になるのですが」（同上）。

(8) 「皇軍大捷の歌」(1938年、詞：福田米三郎)

国を發つ日の万歳に／痺れるほどの感激を／こめて振ったもこの腕ぞ／今その腕に長城を／越えてはためく日章旗

- a. パーマネントに火がついて／見る見るうちに禿あたま／禿のあたみに毛が三本／ああ、恥ずかしや（恥ずかしい） 恥ずかしや（恥ずかしい）／パーマネントはやめましょう（奥田 1969/2001：140、川崎 1994：295、笠木 1995 への投稿、鳥越 1998：178）
- b. パーマネントをかけ過ぎて／みるみるうちにハゲ頭／ハゲた頭に毛が三本／ああ恥ずかしい 恥ずかしい／パーマネントは止めましょう（川崎 1994：295）
- c. パーマネントをかけすぎて／みるみるうちにはげ頭／よくよく見れば毛が三本／ああ恥ずかしや 恥ずかしや／パーマネントはやめましょう（鳥越 1998：178）

——「太平洋戦争中、『贅沢は敵だ』という標語がありました。ジャズレコードは禁止され、兵器を作る材料の金属を集めるため、国の命令で寺の鐘までが召し上げられました。パーマネントなどの調髪用電熱器も電気を節約する方針のもとに使用を止められ、服装も男子は国民服、女子は長袖はいけないと、お調子者のおばさん連中がその運動を進めるため、ハサミを手に銀座へ繰り出したりしました。この軍歌の替え歌もその頃のもので、子供も、パーマネントの女性を見かけると、この歌をうたったりしました。そんなとき、誰かが、『贅沢は敵だ』のなかに一字書き足して『贅沢は素敵』としたという話を聞いたことがあります」（川崎 1994：296）。「今にして思うと、これは子ども自身が作り出した替え歌ではなく、たとえば軍国主義にこりかたまった先生かだれかが作って、子どもたちに歌わせたのが始まりだったのではないだろうか」（鳥越 1998：179）。

(9) 「戦友」（1905年、詞：真下飛泉）

ここは御国を何百里／離れて遠き満洲の／赤い夕日に照らされて／友は野末の石のした

- a. ここは奥さんどこですか／離れて遠き満洲の／赤いまんじゅうに白まんじゅう／一つたべたらうまかった（阪田 1990：93）
- b. 馬に蹴られて痛かった／痛けりゃお医者に診てもらえ／お医者さんの薬は効かなんだ／「おいちに」の薬はよう効いた（阪田 1990：94、鳥越 1998：176）
- c. ここは奥さま旦那さま／離れて遠き奥ざしき／赤いフンドシ チラチラと／ゆれているのも情けなや（郡上八幡市－笠木 1995 への投稿）
- d. ここは都を何百里／離れて遠き玉山の／暗い寝床を抜け出して／友は夜逃げの田舎道（福島県玉山鉱泉の旅館に集団疎開した読者－笠木 1995 への投稿）
- e. ここは奥さんどこですか／離れて父ちゃんマンジュウの／赤いマンジュウ白マンジュウ／二つたべたら（食べてみたら）うまかった（鳥越 1998：175、有馬 2000：271）
- f. うまけりゃ馬にけられて／痛けりゃお医者に見てもらえ／医者さんの薬はよう効かん／「おいちに」の薬はよう効いた（有馬 2000：271）
- g. ここは奥さんどこですか／離れて遠き奥座敷／明い電気をうち消して（有馬 2000：271）

——「(b)について 昔、兵隊を行進させる時、教官は「オイッチ、ニ！」と声をかけた。それが語源の「おいちにの薬売り」は日露戦争の傷兵（昔は廃兵と言った）が生活のためにやり始めたものと言われているだけに、おかしみの底に悲しみがある」（阪田 1990：94）。「「おいちに」の薬は、むかし富

山の行商人が家庭にあずけていった菓である。当時、軍隊などで「おいち、に」と歩調をとって行進していたので、徒歩の行商人を「おいちに」と呼んだ」（有馬 2000：271）。

(10) 「敵は幾万」（1886年、詞：山田美妙齋）

敵は幾万 ありとても／すべて烏合の 勢なるぞ／烏合の勢に あらずとも／味方に正しき 道理あり／邪はそれ正に 勝ち難く／直は曲にぞ 勝栗の／堅き心の 一徹は／石に矢の立つ 例あり／石に立つ矢の 例あり／などで恐るる ことやある／などで撓とう ことやある

- a. お菓子は幾万あるとても／すべて砂糖のせいなるぞ／砂糖のせいにあらずとも／とにかく甘いはベリマッチ／饅頭は羊羹に勝ちがたく／マロンケーキはビスケットに勝栗の／食いたい心の徹に／ゼニ箱さがすこともある／さがしてドツつかれることもある／などで食えないことやある／などでパクつけないことやある（川崎 1994：294、有馬 2000：167）

(11) 「討匪行」（1933年、詞：八木沼丈夫）

どこまで続く泥濘ぞ／三日二夜を食もなく／雨降りしづく鉄かぶと

- a. 何時マデ続く此ノ戦／三年半年食糧ナク／餓死続出ノワガ国民（山中 1982：253）
b. 何時まで続く大東亜戦／三年半年食糧なく／餓死続出の銃後国民／元気な者は絶え果てて／倒れし人の頭髪を／カタミと今は別れ来ぬ（広島県安芸郡船越町 35 歳工員 - 稲垣 1976/1994：128）

—— b は 35 歳の工員が記したものとされ、これを子どもが歌っていたかどうかは不明。

(12) 「南洋航路」（1940年、詞：若杉雄三郎）

赤い夕陽が 波間に沈む／果ては何処ぞ 水平線よ／今日も遙々 南洋航路／男船乗り かもめ島

- a. さらば ラバウルよ 又来るまでは／しばし別れの 涙がにじむ／恋しなつかし あの島見れば／椰子の葉かげに 十字星（1944 ラジオ放送 - 長田 1970：205、有馬 2000：363）
b. さらば沖繩よ またくるまでは／無事な姿でいておくれ／いとし沖繩の島じま見れば／ヤシの葉影に十字星（加太 1965：74）
c. さらば父ちゃんよ もう帰らない／永遠の別れで涙もでない／憎っくき恨めしこの戦いを／やっつけはりつけこの十字架よ（東京 - 笠木 1995 への投稿）

——「(a について) 兵隊は時として見事な替え歌を作る場合があるが此の歌など其の典型的な例である。(中略) 昭和 19 年に『ラバウル小唄』として放送されてから『ラバウル小唄』がこの歌の通称となった」(長田 1970：205)。「替え歌は作詞家の若杉雄三郎が報道部員に従軍中に兵士のために作ったと

も、あるいは歌手の新田八郎が工場や軍の慰問で元歌を歌っていたので、だれかが歌い替えたとも、いわれているが、その経路は不明」（有馬 2000：363）。「(b について) 鹿児島に疎開していた沖縄の子どもたちが歌った」（加太 1965：74）。

(13) 「日本海軍」（1905 年、詞：大和田建樹）

四面海もて 囲まれし／わが「敷島」の「^{あきつしま}秋津州」／^{ほか}外なる敵を 防ぐには／陸に砲台 海に艦^{ふね}

- a. 僕は軍人大好きよ／いまに大きくなったらば／勲章つけて剣さげて／お馬にのってはいどうどう
(発表年不明 -1937 年以前、詞：水谷まさる、鳥越 1998：193)
- b. 僕は軍人大きらい／今に小さくなったなら／おっかさんに抱かれて オッパイ (チチ) 飲んで／
一銭もらって 飴買いに (沖縄 - 船越 1981：225、笠木 1995：15、鳥越 1998：194)
- c. ボクハ軍人大キラヒ／今ニ小サクナツタナラ／オツカチヤンニ抱カレテ／チチノンデ ×××
(オナカ) ノ中ニ／キエチヤウヨ (山中 1982：251、笠木 1995：15)
- d. ボクは軍人大きらい／いまに小さくなったなら／お母ちゃんに抱かれて乳のんで／お膝でスヤス
ヤねんねする (神戸市 - 澤地 1989：14、笠木 1995：15)
- e. 僕は軍人大嫌い／いまに小さくなったなら／お母ちゃんに抱かれて乳呑んで／お膝に乗ってネン
ネする (野村 1991：8)
- f. ドンドン ドンガラガッタ 柿の種／おんまい (おんまや) 橋の看護婦は／^{めし}朝飯^{はん}ご飯^{なんきんまい}が南京米／お
かずは 去年の古たくあん (加太 1965:86、有馬 2000：167)

——「(b について) 子どもたちには、戦争反対の考えや、軍国主義に反抗しようなどという意図も言葉もない。だが、替え歌を作る遊びとパワーはあったのです。この替え歌も替え歌のセオリーで、反対言葉にしてやれ、といった、ことば遊びから生れたものだろう。が、出来てみると、どこかで戦争はイヤだと思っている子どもたちの心にピタッと来るものがあって、全国のあちこちへ伝わっていったのに違いない。(中略) 戦争で逃げ場を失った、兵隊や子どもたちの、最後の逃げ場所は、お母さんのオナカの中に違いない。困ったとき、ぼくらは、そこに逃げこみたいのだ。そんなぼくらの中にある、ぼくらの本能と願望をこの替え歌はハッキリさせている」(笠木 1995：15)。「ぼくが、いまでも感心するのは、『ぼくは軍人』の替え歌だ。まるっきり反対のものにしてしまった子どもたちの知恵だ。ここでは、決して反戦とか、軍国主義への反抗とかいう言葉は用いまい。子どもたちにとって、まだ、これほどの意識はなかったし、ただ、言葉を反対のものにひっくりかえすだけで、よるこんでいたと思う。ただし、その潜在意識に、もし反軍思想ありというのだったら、それは心理学の分野で、ぼくにはわからない」(船越 1981:224-225)。「(f について) おんまい橋は御厩橋のこと。加太こうじは、関東大震災の前年におぼえたという。広目屋とともに町まわりをしていた楽隊が奏するジンタが、このメロディを鳴らすと、やけに太鼓をたたくので、ドンドンガラガッタと聞こえ、それに合わせて柿の種という文句をつけた」(有馬 2000：167-168)。

(14) 「日本陸軍」(1904年、詞：大和田建樹)

天に代りて不義を討つ／忠勇無双のわが兵は／^{かんこ}歎呼の声に送られて／今ぞ出で立つ父母の国／勝
たずば生きて還らじと／誓う心の勇ましき

- a. 天井めがけて釘を打つ／チュウチュウネズミの運動会 (鳥越 1998 : 187)
b. 天井に金づち 釘を打つ／チューチュー ねずみの三勇士／^{かんこ}がんこなオヤジに どなられて／今
日も出て行く 父母の国／打たずば生きて かえらじと／ちこう心のあさましき (有馬 2000 : 293)

(15) 「歩兵の本領 (歩兵の歌)」(1901年、詞：加藤明勝)

^{ぼんだ}万葉の桜か襟の色／^{えり}花は吉野にあらし吹く／^{やまとおのこ}大和男子と生れては／^{さんべいせん}散兵線の花と散れ

- a. 大東亜戦争が勝ったなら／電信柱に花が咲く／ネズミが猫を追いかける／焼いた魚が踊りだす
(宮城県の集団疎開先で - 笠木 1995 への投稿)
b. もし日本が負けたなら／電信柱に花が咲き／焼いた魚が泳ぎ出し／絵にかいただるまさんが踊り
だす (笠木 1995 への投稿)

——「(aについて) 私たちは意味も分からず、でもみんなよく唄いました。そのうちに先生からこの歌は絶対に歌ってはいけないと厳しく言われました。私たちは、その理由が分らず、ただ今まで唄っていた歌が急に唄えなくなるということは、こんなに淋しいものかと感じました。そうだ、この歌は反戦歌だったのだと私が気付いたのは、戦争も終わってずっと後のことでした。この歌は、短い間でしたが、疎開先で唄った私たち生徒の愛唱歌でもあったのです」(笠木 1995 への投稿より)。

(16) 「道は六百八十里」(1891年、詞：石黒行平)

道は六百八十里／^{ながと}長門の浦を船出して／^{ふた}はや二とせを故郷の／^{はるか}山を遥に眺むれば／曇り勝なる旅
の空／晴らさにやならぬ日の本の／^{みくに}御国の為と思えば／露より脆き人の身は／^{もろ}ここが命のすて
どころ／身にはたま傷つるぎ傷

- a. 道ハ六百八十里／長門ノ浦デヒルネシテ／ネズミニ^{きんたま}擧玉カジラレテ／ネコノオ蔭デ助カツタ (山
中 1982 : 253、有馬 2000 : 351)

(17) 「勇敢なる水兵」(1895年、詞：佐々木信綱)

煙も見えず雲もなく／風も起らず浪立たず／鏡のごとき^{こうかい}黄海は／曇りそめたり時の間に

- a. 黒いからだに大きな眼／陽気に元気に生き生きと／少年倶楽部の「のらくろ」は／いつも皆 (み
んな) を笑わせる／／もとは宿なしのら犬も／今では猛犬聯隊で／音に聞えた人気者／笑いの手

柄数知れず／／いくさに出ればその度（たび）に／働きぶりもめざましく／どンドンふえる首の
星／末は大將元帥か／／僕等（ぼくら）は「のらくろ」大好きよ／笑いの砲弾爆弾で／日本国中
ニコニコと／「のらくろ」万歳万々歳（阪田 1990：96）

—— 雑誌「少年倶楽部」の人気連載漫画「のらくろ」の応援歌として同誌に掲載された。「雑誌には、これを『煙も見えず雲もなく』で始まる軍歌『勇敢なる水兵』のメロディーに合わせてお歌い下さいと書いてあった。当時の小学生なら、日清戦争の黄海の海戦の挿話をうたったその軍歌をだれでも知っていたから、歌詞だけ見ればすぐに歌えた」（阪田 1990：92）。

(18) 「露営の歌」（1937年、詞：藪内喜一郎）

勝って来るぞと 勇ましく／ちかつて祖^{くに}国を出たからは／手柄たてずに 死なりょうか／進軍
ラッパ 聴くたびに／まぶたに浮ぶ 旗の波

- a. 負けて来るぞと情なく／しょぼしょぼ国を出たからは／手柄などとは、おぼつかない／チャルメルラッパ聞くたびに／臉にチラチラ敵の剣（沖繩－船越 1981：227）
- b. 負ケテ来ルゾト勇マシク／誓ツテ国ヲ出タカラハ／手柄ナンゾハ知ルモノカ／退却ラツパ聞ク度ニ／ドンドン逃ゲ出ス勇マシサ（山中 1982：253、笠木 1995：6）
- c. 勝って来るぞと勇ましく／誓って国を出たからは／手柄たてずに支那料理／進軍ラッパ聞くたびに／まぶたに浮かぶ支那料理（倉本 1984：87、笠木 1995：6、有馬 2003a：285）

—— 「この替歌には、一番（= b）、二番（= c）、それぞれに替歌づくりのセオリーがあります。一番は、なんでも反対語にしてしまう、という作り方です。元歌が権力や、力の強い立場からの歌であればあるほど、その反対表現はより効果を上げることでしょう。勝つ→負ける、手柄たのむ→知らん、進軍ラッパ→退却、としておいて、どンドン逃げだす勇ましさと、逆説が鋭くきいているのです。子どもたちに深いイミがあったのではなく、あそびはんぶんで反対表現をして、最後にこうまとめたら、大人がドキッとするような、結果として思想的な歌になってしまったのです。

二番は、歌詞のある部分を、ひとつの単語に固定してしまう、という作り方です。当時の子どもたちは、死なりょうかが、支那料理に聞えたらしい。ぼくは、聞き違いから生れた替歌をたくさん知っているのだが、これもそのひとつ。こうなったら、元歌の三行目と、五行目の後半を、『支那料理』に固定してしまうと、なんともナンセンスでおかしい替歌が出来上がるというわけです」（笠木 1995：7）。

(19) 「若鷺の歌」（1943年、詞：西條八十）

若い血潮の予料練^{よかれん}の／七つボタンは桜^{いかり}に錨／今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にゃ／でかい希望の 雲が湧く

- a. （前半2行不明）今日も行く行く 買出し部隊／でっかい袋の イモ背負って（桐生市－笠木 1995への投稿）

- b. 若い元気な小母さんが／七つ八つの子供を連れて／今日も行く行く買出し部隊／帰りに巡査にとっつかまっちゃった（横浜市－笠木 1995 への投稿）

（以下続刊）

<注>

- 1) 本稿において作者不詳の伝承のうたには「唄」を、作詞者・作曲者が特定される創作のうたには「歌」の字を充てる。従って、替えうたは作者が特定される一部のものを除いて「替え唄」と記すこととする。
- 2) 当時の首相、東条英機。

<参考文献>

- ・有馬 敲 2000 『替歌研究』 KTC 中央出版
- ・同 2003a 『替歌・戯歌研究』 KTC 中央出版
- ・同 2003b 『時代を生きる替歌・考 風刺・笑い・色気』 人文書院
- ・稲垣真美 1976 『もうひとつの反戦譜』 三省堂（家永三郎編 1994 『日本平和論大系』 15、日本図書センター所収）
- ・岩井正浩 1987 『わらべうた その伝承と創造』 音楽之友社
- ・奥田継夫 1969/2001 『ボクちゃんの戦場』 理論社／『奥田継夫ベストコレクション』 ポプラ社
- ・長田暁二 1970 『日本軍歌大全集』 全音楽譜出版社
- ・笠木透 1995 『昨日生れたブタの子が 戦争中の子どものうた』 音楽センター
- ・同 2014 『戦時下の子どもがうたった歌』 — 『海にカバ 山にカバ』、子どもの文化研究所『子どもの文化』 2014 年 7 + 8 月号所収
- ・加太こうじ・柳田邦夫・吉田智恵男 1971 『おとなの替歌百年』 アロー出版社
- ・加太こうじ 1965 『軍歌と日本人』 徳間書店
- ・川崎洋 1992 『わたしは軍国少年だった』 新潮社
- ・同 1994 『日本の遊び歌』 新潮社
- ・木乃美光 1988 『欲しがらないで生きてきた』 光文社
- ・倉本聰 1984 『いつも音楽があった』 文藝春秋
- ・阪田寛夫 1990 『童謡でてこい』 河出書房新社（河出文庫）
- ・澤地久枝 1989 『いのちの重さ 一声なき民の昭和史一』 岩波書店（岩波ブックレット No.126）
- ・高橋碩一 1969 『流行歌でつづる日本現代史』 新日本出版社
- ・鶴見俊輔・加太こうじ他 1962 『日本の大衆芸術 民衆の涙と笑い』 社会思想社（現代教養文庫）
- ・鳥越信 1998 『子どもの替え歌傑作集』 平凡社
- ・中沢啓治 1973-1985 『はだしのゲン』 全十巻（内 I～III 巻が戦中期）、汐文社
- ・中根美宝子 1965 『疎開学童の日記 九歳の少女がとらえた終戦前後』 中央公論社（中公新書）
- ・野村章 1991 『証言 昭和史の断面 植民地そだちの少国民』 岩波書店（岩波ブックレット No.186）
- ・橋本左内 1994 『国民学校一年生 ある少国民の戦中・戦後』 新日本出版社
- ・船越義彰 1981 『なはわらべうた行状記』 沖縄タイムス社
- ・山中恒 1982 『子どもが少国民といわれたころ』 朝日新聞社
- ・同 1985/1989 『ボクラ少国民と戦争応援歌』 音楽之友社／朝日文庫
- ・同 1986 『子どもたちの太平洋戦争 一国民学校の時代一』 岩波書店（岩波新書）

（本学文学部教授）